

「わからない」を力に変えて



小澤賢司

■英語は不思議でいっぱい

自分自身のこれまでの英語学習を改めて振り返ってみると、そこには常に英語という言葉に対するある種の‘苛立ち’のようなものがあつたと思います。「お金」は1円10円と数えられるのに money は数えられない、「それは何ですか？」を What's it? とは言わない、know の k は書いてあるけど発音しない (now と発音が違う) 等々、英語にはわけのわからない規則がいっぱいありました。なんといっても一番の衝撃はアルファベットでした。見本では [a] となっているのに、先生は黒板に [a] と書く。今になって考えてみればたいした問題ではありませんが、当時のわたしにとっては衝撃の連続でした。

■調べれば書いてある

その衝撃が良い効果となって表れてくれればよかったのですが、当時のわたしにとっては負の要素でしかなく、2年近くもの間わたしを英語学習から遠ざけました。日々の英語の授業はまさに暗闇の中を歩かされているようで、自分は今どこにいて、何のためにそれをしているのかまったくわからない状態でした。しかし、高校受験が迫る中学3年生のとき、その闇を照らす一筋の光となったのが辞書であり、文法書でした。

たとえば先にあげた「money 数えられない問題」について、『ジーニアス総合英語』（以下、『G 総合英語』）の Question Box には次のような回答があります。

Q money はどうして数えられない名詞なのですか。100円, 1000円, ……というように数えられると思います。

A お金 (money) そのものは数えられません。

数えられるのは、金額の単位 (dollar, pound, euro など) や硬貨・紙幣の枚数 (100円硬貨5枚, 1万円札2枚など) です。日本語で「お金が3つ」などと言わないのと同じように、英語でも ×three moneys などとは言えません。

つまり、われわれが数えていると思っているのはお金ではなくお金を構成している硬貨 coin や紙幣 bill ということです。事実、coin や bill は通例可算名詞として扱われ、coins / bills と複数形にすることができます。

ほかにも、「one of the + 形容詞の最上級 + 複数名詞」という表現は「最も…であるものの1つ」と訳されるのが一般的ですが、当時のわたしは「最も…」という日本語はそもそも1つを意味するはずだから、そのあとにわざわざ「1つ」とくるのはおかしい」と思っていました。こちらでも『G 総合英語』(p.269) には、「本来、最上級で表されるものはたった1つのものであるはずだが、英語の最上級は1つのグループを指すことがある」(下線筆者)と説明されています。つまり、この表現における最上級は、「最高レベルの」や「最大級の」といったように、単に程度が高いことを示すものです。このような最上級を‘絶対最

上級」とよぶことも文法書で知りました。ちなみに、『ジーニアス英和辞典 第5版』の one 項には It is *one* of the greatest mine disasters of this century. という例文があり、日本語訳は「それは今世紀最大級の鉱山事故の1つである」(下線筆者)となっています。

重くて分厚くてかさばるだけの無用の長物と思っていた辞書や文法書を必携するようになったのも上記のような経験があったからこそだと思います。

■「使おう」とする想い

高校生のとき、インターネットを介して海外の高校生と英語でチャット(ときに通話)をするという授業がありました。しかし、話したいことはあるのにその英語がまったく思い浮かびません。周りのみんなもわたしとほぼ同じ状態でした。その惨事の後、事前準備の時間が設けられるようになったのですが、時間があるとなかろうと、思い浮かばないものは思い浮かびません。これまでの英語の勉強は一体何だったのだろうと途方にくれていたとき、はっとあることに気がつきました。それは「英語を使うために勉強してきていなかった」ということです。料理をしようとしないうちに料理番組をみせても、上達はおろか、そこで紹介された調理行程すら覚えていないことでしょう。第二言語習得研究においてもいわれていることですが、それをやろう、使おう、できるようになろうという想いが強くなればなるほど、それを習得したくなる気持ちも大きくなります。それと連動して「知りたい」という欲求も発露します。わたしはこの出来事をきっかけに英語を使えるようになるために英語と向き合っていこうと決心し(大学進学も決め)ました。

■自らの意志で一步を踏み出す

初年次科目として英文法の授業を担当する際、「その木箱取って」や「窓開けっ放しにしたの

誰?」,「そうそう、最近可愛い彼女が出来たんだよ。彼女の笑顔ってマジで最高でさ。あっ LINE の返事がきた」といった表現を英語にさせることを授業の導入にしています。その際注意していることは次の4点です。①中高で習う語彙・文法に限定する,②その日教える文法事項を1つ,2つに絞る(教えすぎない),③いくつかはあえて会話風の日本語にする,④辞書や文法書に書いてある例を参考にする。

紙幅の都合上、各項目の詳細は説明できませんので、④に関してのみ付言しておきます。これまでの種々の研究によれば、いわゆる「できる」レベルに達している学習者のほとんどは自主性・自律性を備えているそうです。すごく大雑把に言えば、自分ひとりでも学習できる状態になっているということです。しかし、いくら自主性・自律性の大切さを中高生・大学生に説いてもそう簡単には受け入れてくれません。そのためにはやはり体験が必要です。そこで、辞書や文法書を使って自分自身の力で解決に至る過程とそれを達成したときの喜びを感じ取ってもらえるよう、④の観点を意識しています。

書店にいけば(今では Amazon かもしれませんが)、「学習」と名の付く辞書・文法書がたくさん並んでいます。そう、日本で売られている辞書や文法書の多くは学習するために編纂されたものばかりです。学習者が知りたいと思うことを編集者や執筆者が先読みし、学習者にとって有益な情報を記載してくれています。しかし、かつてのわたしのように、辞書や文法書を無用の長物と思っている人は辞書や文法書の有益さ・便利さに気がついていないはず。駅近の美味しいお店をスマートフォンで調べるのと同じように、英語の「わからない」を辞書や文法書で調べてみてほしいと思います。自らの意志で一步を踏み出すことが真の英語力の育成へとつながると信じています。

(おざわ けんじ・日本大学助教)